



それぞれが『花燃ゆ』年に・・・

校長 海 頭 巖

昨日、NHK大河ドラマ『軍師 官兵衛』が最終回でした。

実は、『黒田官兵衛』と聞くと、私にはあまりいいイメージがなかったのです。それは、本能寺の変を知って茫然としていた秀吉に身体をすり寄せて「運の明ける絶好の機会だから逃さぬように」と囁いたあの言葉。秀吉の軍師・知恵袋としては当たり前の言葉だけど、どうも腹黒さのイメージが培われてしまっていたように思うのです。しかも、「秀吉幕下の二兵衛」のもう一人、竹中半兵衛にして「あの御仁は、さしでがましい」と言わせていたことが、追い打ちをかけていたのかもしれません。

しかし、大河ドラマを一年間とおして視て、岡田准一さん演じる官兵衛の知略や人柄、また中谷美紀さん演じる妻『光（てる）』の、妻としてまた母としての生き様に感銘を受けてしまったのです。ドラマなので、史実とはかけ離れた部分や脚色はかなりあるとはいえ、これまでの『官兵衛』へのよくないイメージを払拭するには十分だったように思います。（何と単純なのか・・・。）

官兵衛は44歳の時、隠居して『如水（じょすい）』と名を改めます。『如水』となった彼は、後に次のような言葉を残しています。

『常に自然の法則にそって物事を考えなさい。水は温度の変化や器の形によって次々と自らの形を変える。しかし、その本質は一切変わらない。私たち人間もまた、変化に対応するのに常に柔軟でなければならない。与えられた環境の中でいかにして最大の努力をするかが大切だ。』（海頭の超訳による）

『上善如水（じょうぜんみずのごとし）』といいます。これは、最高の人生のありかたは、水のように生きるという意味です。官兵衛も水の特徴を身に付けた理想の生き方をしたかったのではないのでしょうか？『如水』という名前に示されているように・・・。

さて、来年のNHK大河ドラマは『花燃ゆ』です。これは、ヒロインの『文（ふみ）』が、命を燃やし、情熱を燃やし、恋の炎を燃やすという意味で『花燃ゆ』と決まったそうです。山口県萩出身の吉田松陰先生の妹『文』が主人公ということもあって、私たちにとってより身近に感じられ、さらに多くの人がNHK大河ドラマにくぎ付けになるかもしれません。

今年はたいへんお世話様になりました。良いお年をお迎えください。

来年はそれぞれが『花燃ゆ』年にしたいものです。